

令和4年度第1回

札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会

会 議 録

日 時：2022年6月8日（水）午前10時開会

場 所：札幌エルプラザ公共4施設 2階 環境研修室1・2

1. 開 会

○事務局（谷内環境教育担当係長） それでは、皆様がおそろいになりましたので、ただいまから、令和4年度第1回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会を開催いたします。

議事が始まるまでの間、私、谷内が進行役を務めますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、皆様にお配りしている資料について確認をさせていただきます。

クリップ留めの資料の一番上に今回の委員会の次第がございまして、1枚めくっていただきますと、座席表がございまして、さらに1枚めくっていただきまして、資料1は今回の委員の皆様の名簿、資料2は推進委員会の設置要綱となります。そして、資料3は、今回のメインの議事の説明資料で、こちらは1ページから12ページまでとなっております。その下のクリアファイルには、1番から12番までの参考資料を入れております。1番の副教材と手引書は分厚いので、クリアファイルから出してありますが、それ以外のものについては、上から番号順に並べております。

また、新任の委員のみとなりますが、札幌市環境教育・環境学習基本方針の本書と概要版を副教材と手引書の下に入れております。足りない方はいらっしゃいますでしょうか。

次に、本推進委員会の委員の委嘱についてご案内いたします。

今ご案内しました資料2の札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会設置要綱の第4条の規定により、委員の任期は2年とされておりまして、前回の任期は今年4月16日をもって終了しているのですが、令和2年当初からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、前任期中は対面での開催が一度のみという異例の事態となっておりますことから、今回は、特例としまして、再任にご承諾いただける委員の皆様には、次期の委員として引き続きご審議をいただきたく、当方からお願いをさせていただきました。

この結果、学識経験者の太田委員及び増渕委員がご退任となり、新たに北翔大の石澤教授、藤女子大の松田特任准教授にご就任いただいております。また、学校の分野では、今年3月に退職されました幌東中学校の荒島校長先生と旭小学校の吉田校長先生に替わりまして、豊園小学校の能登校長先生と琴似中学校の三浦校長先生にご就任いただきました。ほかの10名の委員の皆様におかれましては、いずれもご再任となっております。

皆様には、4月17日から新たに2年間の任期で本推進委員会委員の委嘱をしたところです。委員の任期は令和6年4月16日までとなっておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、新たな委員の任期が始まったことから、後ほど委員の皆様の全員に自己紹介をお願いしたいと考えております。

次に、委員の出席状況ですが、福岡委員から欠席のご連絡をいただいております。本日のご出席は13人で、委員数14人の過半数に達していることから、推進委員会設置要綱第5条第2項の規定により、本委員会が成立していることを報告いたします。

それでは、議事に先立ちまして、札幌市環境局環境都市推進部長の菅原からご挨拶を申し上げます。

○菅原環境都市推進部長 環境都市推進部長の菅原でございます。

開会に当たりまして、一言、ご挨拶をさせていただきます。

委員の皆様におかれましては、お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。新たな任期での初めての会議となります。皆様には、快く委員をお引き受けいただいたことに感謝するとともに、どうか忌憚のないご意見をお願いいたします。

昨年度も、コロナ禍により各種イベントが中止となるなど、ここ環境プラザの運営にも大きな影響がありました。新型コロナウイルス感染症につきましては、まだまだ予断を許さない状況ではありますが、今年度は、環境広場さっぽろを3年ぶりに札幌ドームで開催することを見込むなど、十分に感染症対策を行った上で、環境教育・環境学習を進めてまいりたいと考えております。

さて、先頃、国連の気候変動に関する政府間パネル、I P C Cの作業部会が行った報告は、産業革命前からの気温上昇を1.5度に抑えるためには、温室効果ガス排出量が3年後の2025年までに減少に転じなければならないと、気候変動対策の加速を強く求めるものでありました。

一方、札幌市では、昨年3月に策定した札幌市気候変動対策行動計画に基づき、2030年の温室効果ガス排出量を2016年比で55%削減するという高い目標を掲げて、様々な取組や、市民、事業者への普及啓発を行っているところであります。

とりわけ、これからの未来を担う若者に環境保全に関わりを持ってもらうことはとても大切なことであると考えており、それを促すための環境教育や環境学習の重要性は、ますます高まっていくものと感じております。

今後も、教育委員会や関係機関のご協力を仰ぎながら、環境教育や環境学習の一層の推進に取り組んでまいりますので、皆様のお力添えをお願いいたします。

本日は、よろしくお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 続きまして、委員の皆様に自己紹介をお願いしたいと思いますが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、これからの自己紹介と今後の議事の進行に先立ち、委員の皆様をお願いがございます。

委員の皆様の机にはマイクを置いておりますので、ご発言の際にはマスクを着用していただくようお願いいたします。また、委員の発言や質疑などが終わった頃を見計らいまして、スタッフがそばに参りまして、委員が使用したマイクの除菌作業を行わせていただきますので、何とぞご協力のほどをよろしくお願いいたします。

それでは、お座りいただいている順番に反時計回りでお願いしたいと思います。

まず、石澤委員からお願いいたします。

○石澤委員 おはようございます。北翔大学短期大学部こども学科から参りました石澤優子と申します。

私は、3月まで小学校で勤務をしております、家庭科を窓口環境教育を進めてまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

○松田委員 おはようございます。藤女子大学の松田と申します。

私は、藤女子大学のキャンパスが石狩にあるのですが、そこで、プロジェクトマネジメントと言いまして、企画を立案、運営したり、イベントをしたり、会社の中でいろいろなプロジェクトを回していくような専門の学科の教員をしております。

もともとは、北海道の留萌管内と上川管内で中学校の教員をして、その後、教育大の附属旭川中学校の教員をして、今に至っております。

環境教育については、いろいろと実践してまいりましたけれども、皆様からまたいろいろとお教えいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

○三浦委員 おはようございます。琴似中学校から来ました三浦英悟と申します。

中学校現場、学校現場として、子どもたちに、環境教育を通してこれからのことを考えてもらいながら、また、自分事以外に、他の人のことも含めて、広く子どもたちに教育できるように私自身も勉強していきたいと思います。2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

○久保田委員 皆さん、おはようございます。私は、市民公募委員として選ばれました久保田と言います。

私は、ずっと高校の教員をしております、退職した後は、市の教育委員会に勤めました。その後、市内のミニ児童会館に勤めまして、現在は、こども未来局傘下の児童福祉の関係の機関で働いております。

2年前のコロナ禍がちょうど始まった頃でしたか、自分はこれまで札幌の子どもたちに関わってきたので、自分が学んできたキャリアを生かし、何か貢献できることがあるのではないかなと思ひまして、市民公募委員に応募いたしました。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

○内山委員 皆さん、おはようございます。北海道環境財団の内山と申します。

ふだんは、公益財団なものですから、寄付金を拝受していろんな事業に使ったり、それから、助成制度を二つほど運用しておりますので、それをもって市民団体への支援等を行っております。

最近では、生物多様性の関係で、道の生物多様性保全計画に市民の意見や新しい考え方をもっとインプットするためのダイアログなどをやっております。

自己紹介があるということで、ここに来るまでに調べてきたのですが、この会議は2016年からやっており、7年目ということで、そろそろ肩をたたかれそうな気がしますけれども、任期いっぱいやらせていただきます。よろしくお願いいたします。

○西塚委員 北ガスの西塚と申します。

エネルギー環境教育を担当しております。どうぞよろしくお願いいたします。

○能登委員 豊園小学校の能登と申します。

小学校では、これまで生活科や総合的な学習の時間などを主に勉強してまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

○村形委員 皆さん、おはようございます。札幌市PTA協議会副会長の村形と言います。

今年で2年目になります。私も最後のPTA活動となりますので、PTAが環境に関して何かできることがないかを勉強していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○坂本委員 余市から参りましたNPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトの坂本と申します。

私たちの活動は、6ヘクタールの拠点がうちにあるのですが、農地と樹林地と雑種地があり、持続可能な暮らしとコミュニティというすごく大きなテーマで、それに関わることは何でもやるという団体です。何でもやるというのは、実践して、そこで自分たちで食べ物をつくったり、ワインをつくったり、再生可能エネルギーを使ったりして、いろんな人たちに学びの場と機会を提供するということです。以前はいろんなことをやっていても何をやっているか分からないと言われていたのですが、最近、SDGsという概念が普及するようになってからは、ああ、あれをやっているのねというふうに理解していただけるようになって、学校からの講座や研修の受入れのリクエストが増えるようになりました。

今、いろいろと研究思考中なので、皆さんから教えていただきたいなと思って参加しています。どうぞよろしくお願いいたします。

○有坂委員 RCE北海道道央圏協議会の有坂と申します。

RCEというのは、今、世界に180か所ぐらいあると思うのですが、持続可能な開発のための教育、ESDを進めるための推進拠点として、国連大学から認定されている組織でありまして、ここにいらっしゃる方の中にも会員になっていただいている方がいらっしゃいます。

環境教育・環境学習と言うと、この委員の方たちを見ても、子どもたちという意識が強いかと思いますが、私は、決してそうではないと思っております。未来を担う子どもたちという言い方ももちろんできますが、今を変えなければ未来は変わりませんので、大人にもしっかりとやっていく必要があると思っています。子どもに限らず、大人も含めた環境教育・環境学習を進めていけたらと思っていますので、よろしくお願いいたします。

○伊藤委員 皆さん、おはようございます。

2人目の市民公募委員の伊藤と申します。

私も札幌市の中学校の教員をずっとしていましたが、退職後、今年の春まではミニ児童会館におりまして、昨年は、こちらにあります環境教育・こどもワークショップをさせていただきました。

現在も北海道エネルギー環境教育研究委員会というところに属しておりまして、環境にずっと関わってきた中で、まだ私にも何かできることがあるのではないかなと思い、公募

をさせていただきました。また2年間、引き続きよろしくお願いいたします。

○野崎委員 八軒小学校の教頭の野崎と申します。

振り返ると、もう6年から7年、こちらの会議にお世話になっているかなと思います。いろいろな経緯も知っているつもりでいますし、僕は小学校で社会科をやっていますので、そちらの窓口から皆さんとともに話しできればなと思っています。よろしくお願いいたします。

○大沼委員 北海道大学の沼田です。

教育や学習は専門ではなく、環境行動の専門ということになっているので、そちらの立場で委員として出席させていただいているのかなと思っております。

最近、環境省から少し大きめの予算がついているプラスチックのプロジェクトに関わらせていただいています。今、マイクロプラスチックが大きな問題となっていますが、そのかなりが河川由来であり、そのかなりがポイ捨てだということが分かっておりまして、それをどうやって減らしたらいいのだろうということについて、こちらの環境局環境政策課をはじめ、いろんな方々の力をいただきながら、今、社会実験をやっているところです。コロナ禍で外に出て人とのつながりを実感することがなかなか難しくなったことも遠い要因の一つかなと現場を歩きながら思っているところです。よろしくお願いします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 皆様、どうもありがとうございました。

続きまして、事務局の紹介をさせていただきます。

まずは、環境政策課長の東館でございます。

○事務局（東館環境政策課長） 環境政策課長の東館です。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（佐野推進係員） 佐野です。よろしくお願いします。

○事務局（鈴木企画担当係長） 教育委員会の指導主事の鈴木でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ここまでお話しさせていただいております環境政策課の谷内と申します。よろしくお願いいたします。

また、本日は環境プラザの方もいらっしゃっていますので、よろしくお願いします。

○札幌市環境プラザ（川村係長） 札幌市環境プラザを担当しております川村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

○札幌市環境プラザ（宮西主任指導員） 札幌市環境プラザの宮西でございます。よろしくお願いいたします。

2. 議 事

○事務局（谷内環境教育担当係長） 議事に入る前の連絡事項が長くなりまして、申し訳ございません。

今回、新たな委員の任期が始まった第1回目の会議のため、最初の議事（1）として、

会長と副会長の選出をしたいと思います。

選出につきましては、資料２の札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会設置要綱第３条第３項の規定により、委員の互選とすることとされております。

まず、会長の選出から始めたいと思います。

お引き受けいただける方、または、どなたかを推薦していただける方はいらっしゃいますか。

○有坂委員 大沼委員にぜひ会長をしていただければと思います。

先ほど環境教育は専門ではないとおっしゃいましたが、環境審議会でも一緒に委員をさせていただいていまして、いつもその辺りのことをすごく専門的にやられていて、現場も歩いていらっしゃるということなので、適任かと思うのですが、いかがでしょうか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ただいま、有坂委員から大沼委員を会長にというご推薦がございましたが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（谷内環境教育担当係長） 大沼委員もよろしいでしょうか。

○大沼委員 はい。

○事務局（谷内環境教育担当係長） それでは、大沼委員に会長にご就任いただくということで、よろしくお願いいたします。

続いて、副会長の選出に移りたいと思います。

どなたかお引き受けいただける方はいらっしゃいますか。

副会長の役割は会長の補佐ということでもございますので、会長とされます大沼委員のご意見を伺いたいと思うのですが、いかがでしょうか。

○大沼会長 学校教育の現場に長く勤められていて、また、大学の立場、子どもを教える立場など、様々な視点から見られている石澤委員が適任かと思うのですが、いかがでしょうか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ただいま石澤委員を副会長にというお話がございましたが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（谷内環境教育担当係長） 石澤委員も、よろしいでしょうか。

○石澤委員 かしこまりました。

○事務局（谷内環境教育担当係長） それでは、会長は大沼委員、副会長は石澤委員にお願いいたします。

早速ですが、大沼会長と石澤副会長には、会長席、副会長席にそれぞれご移動をお願いいたします。

〔会長、副会長は所定の席に着く〕

○事務局（谷内環境教育担当係長） せっかくですので、大沼会長と石澤副会長から一言いただければと思うのですが、お願いできますでしょうか。

○大沼会長 ご指名をいただきましたので、僭越ではございますが、会長を務めさせていただきたいと思います。

会長はあくまでも司会進行で、菅原部長からもあったように、委員の皆様からの忌憚のないご意見があつての委員会かと思いますので、積極的にいろんな観点からご発言をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○石澤副会長 大沼会長からご推薦をいただき、副会長を仰せつかりました石澤と申します。大変不慣れではありますが、札幌市の環境教育の推進のため、また、会の運営のため、会長を補佐し、しっかりと務めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ありがとうございます。

それでは、この後の議事進行を大沼会長にお願いしたいと思います。

○大沼会長 それでは、議事進行を務めさせていただきます。

まず、議事（２）令和３年度環境教育関係事業の実施結果及び令和４年度同事業の実施予定についてから進めていきたいと思いますので、事務局からご説明をよろしくお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） それでは、説明をさせていただきます。

お手元の資料３をご覧ください。

参考資料としてパンフレットやリーフレットなどもございますので、併せてご説明できればと思います。

まず、１の「はじめに」のところですが、こちらは、２０１９年に改訂した札幌市環境教育・環境学習基本方針の取組の四つの柱を示したものです。

環境教育関係事業は、１ページの下段に記載がありますように、（１）の学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進、（２）の「環境人材」の育成、（３）の環境教育・環境学習の場と機会の充実、（４）の普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押しの四つの取組に基づいて実施していることから、各事業をそれぞれの取組に分類し、取組ごとに区切りまして、昨年度の実施結果及び今年度の実施予定について順にご説明いたします。

なお、昨年度の取組結果のうち、前半に行われたものについては、昨年１２月の委員会において説明済みですので、今回再任された委員におかれましては、既にご存じの部分もあろうかと思いますが、今回、新任の委員もいらっしゃいますことから、何とぞご容赦くださいますようお願い申し上げます。

まず、前半部分として、（１）の学校などの教育機関等で行われる環境教育の推進、（２）「環境人材」の育成について、一括してご説明させていただきます。

次の２ページ目をご覧ください。

最初に、アの環境副教材・教師用手引書についてです。

毎年度、市立小学校の新１年生、３年生、５年生の全児童に環境副教材を配付しており、それぞれ２か年にわたってご利用をいただいております。あわせて、教師用の手引書も作

成しています。より利用しやすい副教材や手引書とするために、「理科」「社会科」「家庭科」「生活科」「特別な教科道徳」の各担当教員によるワーキンググループを組織し、毎年度、改訂作業を行っております。

次に、イの環境教育へのクリック募金についてです。

これは、インターネットを活用した環境教育への支援制度です。札幌市環境プラザのホームページ上で、現在7社ある協力企業の環境活動を紹介しておりまして、閲覧者数に応じた金額を協力企業からご寄附いただき、それを原資として環境教育教材を購入し、希望する学校へ寄贈しています。

昨年度は、計41校に対し、手回し発電機、酸素や二酸化炭素の濃度を測るガス検知管や顕微鏡、トマトやエダマメの野菜の苗などの環境教育教材を寄贈しました。今年度は計40校から希望があり、同様に寄贈を予定しております。

なお、クリック募金のホームページ上には、寄贈された環境教育教材が各学校でどのように活用されたのかを事業報告書として紹介しております。昨年度の事業報告書をホームページで公開しており、お手元にも参考資料としてご用意させていただきました。

次に、ウのエコライフレポートについてです。

これは、子どもたちが声かけ役となり、家庭におけるエコ行動を促す取組として、平成19年度にスタートした事業です。夏休み及び冬休みの前に、市立小・中学校の全児童生徒に対し、家庭で取り組むエコ行動を選んで実践できるチェック表を配付します。

昨年度は、札幌市が市内の温室効果ガス排出量を2050年に実質ゼロとするゼロカーボンシティを宣言したことを踏まえ、「ゼロカーボン都市をめざそう！」をキャッチフレーズとして、気候変動について学びながら節電や地産地消などに取り組んでもらう内容としました。

また、小学4年生以上には、自らエコにつながると思う行動を考えて記入し、実践してもらう欄も新たに設けたところです。

また、学校単位で子どもたちの取組結果を二酸化炭素削減効果に換算し、これを記した認定証を配付しておりまして、子どもたちが自ら考えて実践した取組の中でユニークなものについては、認定証の中に「他にもこんな取組をしてくれました！」という欄を設けて紹介しております。

お手元に、昨年冬の実施結果や、レポートと認定証のサンプルがございます。

なお、エコライフレポートは、昨年8月に、イクレイといいまして、下の※印のところにるように、日本語では持続可能な都市と地域をめざす自治体協議会と訳されております、世界で1,750以上の自治体で構成される国際ネットワークの国際版に、日本のユニークな活動の一つとして取り上げられました。英語では、「Eco-Life checklist」として紹介されております。

また、夏休みに民間団体の主催でオンライン開催された子どもをターゲットとする環境イベントのエコチルまつりにおいて、エコライフレポートに関するブース出展を行い、エ

コライフレポートの取組方法やエコ行動の事例紹介など、札幌市の取組を周知しました。

3 ページの下に表がございますが、前年度のエコライフレポートの取組率は、小・中学校全体で、夏休みが 93.9%、冬休みが 92.5%でした。取組率が令和2年度以前より低下しているのは、コロナ禍により思うように取組ができなかった学校が多かったことなどによるものと考えられます。

めくって、4 ページには、子どもたちによる二酸化炭素の削減量と、子どもたちが自ら考えて実践した取組の一部を抜粋して載せております。

エコライフレポートのコピーと認定証のサンプルは、クリアファイルの中の資料にありますので、ご参考にしていただければと思います。

なお、今年度からは、紙のエコライフレポートの提出用紙を各学校で回収、保管し、それを環境局において集約、集計するという一連の事務作業の負担を軽減するため、教育委員会とも協議を行いまして、G o o g l e フォームというウェブアプリケーションを使用した取組後の振り返り用の入力シートを新たに作成し、夏休みと冬休みの後、各児童生徒にタブレットからこのシートに取組結果を入力してもらう形式に変更することとしました。

お手元には、去年のエコライフレポートがあると思いますが、こちらはミシン目で切り取って下の部分を学校に提出するようになっておりました。今年度はそれがなくなりまして、代わりにQRコードを載せることとしております。各児童生徒がタブレットでQRコードを読み込むと、タブレットの画面にG o o g l e フォームの入力シートが出てきますので、休み中に取り組んだ紙のエコライフレポートを見ながら、取り組んだ内容について入力するというイメージでございます。

続きまして、4 ページのエは、校外学習用バスの貸出しについてです。

環境に関する体験学習の場の提供を目的に、市内の小・中学校を対象に校外学習用バスの貸出し事業を行っております。学校現場のニーズなどを踏まえ、平成28年度からは市外の近郊や民間施設も見学対象施設に加え、太陽光発電や風力発電の設備、LNG基地などを見学コースに組み込んでいるほか、各学校が独自に希望する見学先についても対応しております。

お手元の参考資料では、利用実施例の紹介をさせていただいております。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、児童生徒が座席間隔を空けて乗車できるよう1校当たりの貸出し台数を増やした上、申込みのあった全学校で実施しているところです。

貸出し実績の推移と今年度の主な見学先については、4 ページと次の5 ページに表がございます。令和3年度は、コロナ禍の影響もございまして、申込みの学校数も減少しておりますが、バスの席を一つ置きにしたため、バスの利用台数については令和元年度と同程度となっております。

今年度についても、利用する学校数は調整中ですが、新型コロナウイルス感染症拡大防止への配慮の下、貸出し期間を10月1日から11月30日までとして事業を実施する予

定でございます。

続きまして、5 ページのオは、学校での出前講座の実施についてです。

札幌市では、市民への情報提供と対話の一環として、市職員が依頼に基づいて地域に出向き、所管事業について分かりやすく説明を行う出前講座を実施しております。近年は、SDGs の普及や地球温暖化、気候変動への関心の高まりにより、これらの講座への依頼が増えており、総合学習などの授業の一環として活用されているところです。

こちらに昨年度までの実績を載せておりますが、昨年度は、コロナ禍であるにもかかわらず、多くの方にご利用をいただきました。

今年度も既に私が講師として4校に行かせていただいたのですが、先生のお話などを聞くと、SDGs や地球温暖化、気候変動などは、先生自身が学校で専門的に勉強する時間がなかなかとれないことや、自分が話すよりも市役所の人に来てもらったほうが子どもたちも話を聞いてくれるということで、出前講座を利用してよかったという感想をいただいております。大変うれしい限りでございます。

次に、資料をめくりまして、6 ページのカは、環境に関する全園、全校の取組についてです。

教育委員会では、環境首都・札幌の宣言日である6月25日の前後2週間を「さっぽろつ子環境ウィーク期間」とし、この期間中、エコスクール宣言校である全ての市立の園や学校が環境に関わる取組であるエコアクションを重点的に見つめ直すことで、年間を通して、札幌市の幼児、児童生徒に環境を守り育てようとする態度を育てております。

今年度は、SDGs の視点で教育課程を見直し、環境について持続可能な取組をエコアクションに位置づける予定となっています。

続きまして、(2)の「環境人材」の育成についてご説明いたします。

まず、アの環境保全アドバイザーと環境教育リーダーの派遣は、環境プラザの事業となります。こちらは、市民団体、町内会、学校などに対し、環境に関するアドバイザーやリーダーを派遣する制度です。

札幌市環境保全アドバイザー派遣制度は、地球環境、自然保護、リサイクル、ごみ問題など、様々な環境分野の研修会や学習会などに専門家を派遣する事業で、令和4年5月1日現在、10人のアドバイザーにご登録をいただいております。

札幌市環境教育リーダー派遣制度は、主として、野外での活動を通して、植物、野鳥、昆虫、水生生物などの自然観察会や地球温暖化、ごみやエコライフ分野の指導者や解説者を派遣する事業で、令和4年5月1日現在、26人のリーダーにご登録をいただいております。

アドバイザーとリーダーの派遣期間は、例年、5月1日から3月31日までですが、令和3年度は、新型コロナウイルス感染症対策に係る緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置のため、5月4日から7月11日及び8月28日から9月30日まで派遣事業を中止したことから、アドバイザー、リーダーともに、令和2年度に引き続き、派遣件数や参加人

数がコロナ禍以前の年度に比べて大きく下回りました。

今年度につきましても、コロナ禍以前の件数までの回復は難しいと予想されますが、例年利用いただいている団体を中心に依頼をいただいておりますので、新型コロナウイルス感染症に留意しながら派遣事業を継続していく予定です。

なお、近年、複数のリーダーの派遣が必要となる川での水生生物観察会や幼稚園、保育園における自然体験会などの申込みが増加しており、対応可能なリーダーが不足していることから、昨年度に新規募集を実施し、今年度から新たなリーダーとして4名を委嘱しました。今年度も、来年度からの新たなリーダーを募集する予定です。

次に、7ページのイは、こどもエコクラブについてです。

環境プラザは、公益財団法人日本環境協会が実施するこどもエコクラブの札幌市内における事務局を担っておりまして、こどもエコクラブへの登録団体及びこれから環境に関する活動を始めようとする団体への情報提供を行っております。

令和3年度は、環境プラザが自ら運営するこどもエコクラブを立ち上げ、「さっぽろあそエコ団」として活動を行いました。市内の川や公園、山での自然体験活動の4回を含む全7回を実施し、最終回には保護者に向けた活動発表を行いました。

今年度は、活動場所の変更と、さっぽろこども環境コンテストへの出場を加えまして、自然体験活動の4回を含む全9回の活動を実施予定でございます。

次に、ウは、指導者向け研修についてです。

こちらは、教員や保育者など、子どもたちへ伝える立場の方を対象に、環境教育や環境保全活動をテーマとした講座などを実施しているものです。

昨年11月にオンラインで実施した「Growing Up WILD 養成講座」では、教育関係者や児童会館の職員など、様々な立場の方が参加しました。当該講座は、オンライン研修により、エデュケーター（一般指導者）の資格の取得が可能なことから、資格取得希望者への支援とともに、同じ興味や関心を持つ層の関わり合いや学ぶ機会を創出することができました。今年度は2回程度の実施を予定しております。

次に、エは、環境教育・子どもワークショップの開催についてです。

これからの未来を担う子どもたちが地球環境を意識して生活する心を育み、自発的な行動につなげるきっかけとなることを目指した環境教育・子どもワークショップを令和4年1月15日と22日の各日に5か所ずつ、計10か所の児童会館に通う小学生を対象に実施し、2日間を合わせて66名が参加されました。

ワークショップは、本部のメインファシリテーターから児童会館の各会場にオンラインでプログラムを配信し、各会場では、現地のファシリテーターの誘導により子どもたちが対面によりコミュニケーションを取るとともに、オンラインで各会場と意見交換をするなど、オンラインと対面をミックスして行いました。

あわせて、環境教育に興味があり、ワークショップなどのスキルを身につけたい高校生や大学生などの若い世代の人材育成にも同時に取り組むこととし、希望する若者を対象に

ファシリテーター等の養成研修会を実施し、受講した13人には子どもワークショップの運営スタッフの一員として活動してもらいました。

実施後のアンケートでは、8割以上の参加者から、楽しかった、また参加したいとの回答をいただいております。非常に満足度の高い取組であったと言えることから、今年度も同様のスタイルにより引き続き実施する予定です。

アンケート結果や開催結果報告は、参考資料にもございますので、ご参考にしていただければと思います。

次に、才は、教員に向けた研修についてです。

教育委員会では、札幌市の学校教育に携わる教職員の資質向上と専門的な力量を高めることを目的に、環境教育へ役立つ施設の活用や環境教育の基礎など、環境教育に関する専門的研修を実施し、今年度も延べ60名以上の教員が受講する見込みとなっております。

(1)と(2)の説明については以上でございます。

○大沼会長 ただいま、前半分の(1)と(2)のご説明をいただきました。ここまで委員の皆様からご意見はございませんか。個別にこの部分ということでも結構ですし、全体的あるいは複数をまとめてでも結構です。

○久保田委員 私は、資料を見ていて幾つか気がついたことがあるので、まず、その一つをお尋ねしたいと思います。

説明資料では4ページになるかと思います。

エコライフレポートの絡みで、先ほど、Googleフォームによりデジタル化をし、集約について整理をしたということがありました。前回の会議において、紙で提出することについては問題があるので、いろいろな改善が必要ではないかという話が出たと記憶しているのですが、これは、それを踏まえた改善がなされたという理解でよろしいでしょうか。

○事務局(谷内環境教育担当係長) エコライフレポートにつきましては、今お話をいただきましたとおり、前回の会議で紙のエコライフレポートが資源の無駄になっているのではないかというご意見がございました。今、生徒一人一人にはタブレットが配られていることから、例えば、夏休みや冬休みに子どもたち一人一人がタブレットを持ち帰って、それにより入力できるようになれば、もしかしたら紙自体が要らなくなるのかなとは思っています。ただ、これも前回の委員会でお話があったとおり、現状としては、子どもたちが夏休みや冬休みという長期間タブレットを持ち帰るのはなかなか難しく、まだそこまでは至っておりませんので、紙については今年度も引き続き配ることとしております。

今後、数年の間に子どもたちが家庭に持ち帰れるようになってくれば、いずれ紙のレポートは要らなくなるのではないかと考えておりますので、学校での推移を見ながら、私たちもいずれ紙のレポートをつくらなくてもいいようにしていければいいと考えております。

○久保田委員 今のことと関連するのですが、私は、去年に行われた書面会議のときに幾つか意見を出していて、たしかその中の一つとしても書いた記憶があります。

エコライフレポートの中で、当時は子どもたちが自分の行動がどうだったかを自己チェックする項目がたしか10項目あったのですが、私の個人的な考えとしては、ただ項目にチェックをするだけではなくて、子どもたち自身が気づきを深めて、より主体的に行動できるようにすること、自分たちが工夫してできるエコライフの活動がどういうものかを考えてもらうことが大事な観点ではないかということを書いたように思うのです。そして、事務局で検討された結果、これを整理して10項目から6項目に減らしたのかと思うのですね。

もう少し細かく言いますと、別添でエコライフレポートの取組結果についてという参考資料があるので、皆さんも見ていただければと思いますが、ここの中身をよく見ますと、小学校、中学校と分かれていて、例えば、1番から6番まで項目が整理されていて、7番に自由記述欄があります。細かく言うと長くなるので、簡単に言いますが、例えば、水を出しっ放しにしない、ご飯を残さず食べる、暖房の設定温度を1度下げる、入浴は間隔を空けないようにして入る、冷蔵庫の出し入れは短い時間で済ませるとありまして、ここまでは何となくそうだなと思うのですけれども、6番に家族みんなが一つの部屋に集まって過ごすとありますよね。これを私が見たときの印象としては、1番から5番までとは視点が若干違うように感じたのです。これは、そうすることで暖房の節減効率もあり、無駄が減るという観点でつくられたのかと思うのですが、子どもたちの住環境というのは様々なのです。住環境に恵まれている子どもたちについては、家庭団らんということも含めて、それから、暖房の効率化を図るという観点でいいのかなということで、きっと含まれているのだと思うのですが、中には、そうではなく、本当に大変な状況の家族もいるので、親御さんがこれを見たときに、1部屋、2部屋しかないのにこんな観点があるのだなと思われる人もいるかと思うのです。

それから、前のページのパーセンテージを見ると、ここだけ小学校と中学校が若干低いですね。40%台ではないでしょうか。ですから、この観点が1番から6番にせっきく整理されたものの、ややそぐわないと言ったら変だけれども、そういう印象を私は受けるのです。もちろん継続的に調査をする意味はありますし、これはこれでそれなりに意味はあると思いますが、エコライフの取組として、この視点がどうなのかなという感じが個人的にしたので、今、発言させていただきました。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 今お話しいただきましたエコライフレポートの項目につきましては、表面のスローガン、去年で言えば、「ゼロカーボン都市をめざそう！」というものだったのですが、それに沿ったものの中で子どもたちが取り組みやすいものを私たちが選定させていただいているところです。

今、ご意見をいただきましたので、私たちも、エコライフレポートの項目づくりに当たっては、そうした配慮についても考えていきたいと思っております。

○大沼会長 ほかにございませんか。

○坂本委員 私からも、今の話題の取組項目についてご意見を申し上げます。

北海道の二酸化炭素排出量は、もちろん暖房やエネルギーもありますが、農業の部門がかなり多いですね。札幌に住んでいる小学生が農業に直接関わることはもちろん無理なのですが、ふだん食べている野菜や果物、乳製品などが実は地球環境に負担をかけていて、自分がそれを削減できるというのは、小学生でも分かるのではないかと思います。つまり、環境負荷の少ない方法で栽培されているものや、また、地球の裏側からエネルギーを消費して運ぶものではなくて、もっと近くでつくられているものを食べる消費行動ということです。小学生は自分で買物をしないので難しいとは思いますが、親御さんとお話をする機会があったら、むしろ家庭における大人の環境教育になるかと思います。

また、7番のエコについての取組を自分で考えてみようというのは、すごくいいことだと思うのです。どうしても子どもたちが取れるアクションは限られているし、考えつかないので、ここのところを家族で一緒に考えたり、ご両親に相談したりして、アクションの幅をもう少し広げられたらいいのではないかと思います。車に乗る乗らないというのもそうだと思いますが、そこは子どもたちが自分では決められないので、ご両親と一緒に考えてみましょうという項目があると、お父さんやお母さんたちの行動も変わるのではないかと思います。

○大沼会長 ほかにございませんか。

○松田委員 私もエコライフレポートについて思ったことがあるのですが、先ほど、今年はペーパーを使用されると聞いたので、それはよかったなと思っています。

ただ、一つとして、小学校4年生以上と書いていましたけれども、小学校4年生で入力がスムーズにいくのか、記述するための入力スキルがあるのかが気になっています。しばらくはペーパーだということで少し安心したのですが、行く行くは、Googleフォームだけではなくて、もしかしたら担任の先生等々にご迷惑をかけるのかもしれないけれども、やっぱりペーパーももう少し要るのかなという気がしていました。

2点目は、この取組は非常にいいなと思って拝見をしていましたが、私はこれを初めて見るので、ちょっと分からないので質問をするのですけれども、これが一体、学校教育の中のどこに位置づいているのかなというところが疑問です。もちろん、学校教育の中で、それぞれの学校や担任、もしくは教科担当の裁量でやっていらっしゃると思うのですが、それがただやっているだけではなくて、どこかにひもづいていたり、児童生徒の学習にどのようにつながっているのかが見える化されているといいと思ったので、その辺が今はどうなのかということと、学校の先生方がこれをどのように活用されているのかを調査されているのか、お聞きしたいと思います。

○大沼会長 松田委員のご発言は、どちらかというと現場の先生方への質問に近いと思います。1点目は、入力がスムーズにいくかどうかというテクニカルな話で、しばらくはペーパーとの併存がいいのではないかと思います。

2点目は、学校教育の現場でこれをどのように位置づけているのか、子どもの学びにどうつながっているのか等々のご質問でしたが、もし学校現場の先生からうちはこうやって

いるということがあれば、お願いしたいと思います。

○野崎委員 多分、現場に一番近いので、私からお話をさせていただきます。違ったら違うと言って、周りの先生方も助けてください。

一つ目の入力については、比較的たやすいと思っています。G o o g l e フォームには選択して入れる形になるので、多分、学年が小さくてもできるのではないかと思います。非常に感謝しているのは、大体、教務主任や保健主事など、担任以外の先生が最後に集約するのですが、なかなか集まらなくて先生方は大変苦労されていたので、働き方改革の面でも入力に変わったことは非常によかったと思っています。

二つ目ですが、ペーパーはやっぱり要ると思います。先ほどの項目の話になりますが、項目を示すことによって、これはSDGsにつながるのだという気づきにつながるので、先ほど久保田委員からもリクエストがありましたけれども、やっぱり内容はいろいろと考えながら、あるいは、もしかしたら毎年変えていってもいいかもしれませんよね。それは、新しい視点を子どもたちが持つ、あるいは、それを冷蔵庫などに貼って保護者が一緒に学ぶ機会にもなるので、もしかしたらペーパーを併用するのも意味のあることではないかと感じています。

僕らも、授業のときにタブレットやパソコンを使ったり、いろいろな形でプレゼンソフトも使いますが、黒板に貼るというのもやっぱり大切なことなのです。これは残るのですね。ですから、そういうものをうまく併用しながら効果的に生かせればいいのかと思って、お話を聞かせていただきました。

3点目は、現場の先生方ですね。現場の先生方は、これを振り返るときに、必ず子どもたちと話しながらやりますので、非常に意味があると思っています。先生たちも子どもたちもやるということは、結局、学校においても、電気を消そうとか、水を止めようとか、そういう視点にもつながると思っています。

また、位置づくのかということですが、これは市教委の鈴木先生にも後で聞いてみたいと思います。なかなか位置づかないので、先生方は隙間の時間を使っているというのが正直なところです。ただ、隙間と言っても、全くないわけではなくて、ある先生は総合、学年によっては総合でこういうことに取り組んでいる学年もあるし、社会科や理科、家庭科などのそれぞれの授業の中で一部としてこちらを使うと。学活として取り扱うことも現場では多いと思っています。

○大沼会長 非常に具体的に現場での使い方をご説明いただいたと思います。

ほかにございませんか。

○松田委員 どこに位置づくかというのは、多分、学校の先生方の裁量だと思うので、それはそれでオーケーだと思うのですが、これは、生き方、在り方にもつながってくるような気がしていて、特別活動領域なのかと思いながら見ていたので、私の素人目線ですけども、そこに少しひもづけながらやられるといいのかなと思い、お聞きしました。

○野崎委員 ひもづけてもらえると、僕ら現場の教師たちも、これは社会科の時間でやろ

う、あるいは、家庭科でやろうということが出来るのです。逆に、ふわっとした状態で出されると、現場としてはいつどの時間で工面しようかということになってしまうので、今の松田委員のお話は、非常に応援していただいているのかなと思いながら聞かせてもらいました。

○大沼会長 事務局からお願いします。

○事務局（東館環境政策課長） 事務局から、1点、補足説明をさせていただきます。

先ほど坂本委員から、項目の中にいわゆる地産地消的な視点を盛り込むことも一つではないかというご意見をいただきまして、ごもっともだなと思いながら伺っていました。

この項目については、私どもも、毎年、今年はどうしていこうかという見直しをしているのですが、今年の夏休みのエコライフレポートには、ご意見をいただいたように、北海道で採れた野菜を食べようという項目を入れることを案として考えていたところですので、今日いただいたご意見も踏まえて、項目については、これからも適宜見直していこうと思っています。

○大沼会長 久保田委員がくしくも最初におっしゃったとおり、まず、自分で振り返ることを考えるということと、いろんな家庭があることを考えながらやるということ、そして、坂本委員からは、地産地消や、大人、家族との会話につながるような項目に工夫してほしいというリクエストがあり、松田委員からは、それが社会科などの各授業とひもづけられるといいねというお話だったと思います。今の東館課長からの説明では、毎年更新していくということでしたので、今年の夏に向けて、いただいたご意見を反映させながらやっていただくようお願いしたいと思います。

エコライフレポートについて随分長い議論になりましたが、ほかの部分についてはいかがでしょうか。

○内山委員 クリック募金について意見があります。

協力企業としてお隣にも北ガス様がいらしていますので、まずはご支援に感謝したいと思います。

今年度は40校から希望があるということですが、収支の状況、つまり資金として足りないのか、十分なのかということが一点。次に令和3年度が7社、2年度が8社で、その前もたしか7社ぐらいだったと思うのですが、あまり協力企業が増えていないのではないということ、また業種がリサイクル系の会社に偏っているという印象を受けていまして、もっと広報してもいいのではないかと思います。札幌市の場合は、札幌商工会議所という企業と直接つながっている組織がありますし、環境やSDGsに力を入れている企業もだんだん増えてきています。

私の業務の範囲で恐縮ですが、北海道フロンティアキッズ育成事業を実施しており、道内の49社から総額230万円ぐらいのご寄附を受けて、事業運営を全て寄附金でやっております。札幌市内には、もっといろんな企業がいらっしゃると思いますので、広報にもっと力を入れた方がよいと思います。どういった広報をされているのかをお聞きしたくて

質問いたしました。

○大沼会長 札幌市からいかがでしょうか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ご質問をありがとうございます。

まず、ご質問の予算についてですが、昨年度に関しましては、いただいた寄附金で希望された教材については賄うことができて、今年度についても賄える見込みであります。

ただ、今ご指摘がありましたとおり、協力企業は、長期的に見ても減少傾向が続いておりまして、なおかつ、企業の業種が偏っているということもあるものですから、私たちとしてもPRを行っていきたいと考えております。例えば、ホームページの改修を行ったり、クリック募金はこのように使われているという紹介や、企業を募集しますという広報を行うことで協力企業を増やしていき、なおかつ、制度をより多くの学校に使っていただけるよう、学校にも呼びかけていきたいと考えております。

○大沼会長 クリック募金について、スポンサー側である北ガスさんから見て、お金を出す企業側としての魅力はありますか。

○西塚委員 微力ながら弊社として何かできるかというところで参画させていただいております。エネルギー環境教育は、特に、環境問題に非常に直結するところなので、少しでも何かを考えるきっかけになればと思います。子どもたちが中心になりますので、分かりやすいキッズサイトをつくって、学んでいただきながら、かつ学ぶだけではなくてそのサイトをクリックしたら、さらに環境活動の後押しにもつながるので、この仕組みは、社会的な次世代教育への貢献活動をしていきたいという当社の理念に合致しており、初年度から参画させていただいております。もっといろんな企業が入ってきてもいいのかなと感じていますが、おそらく、認知度がそもそも高くないのだと思います。ですから、広く広報をするとよいのではと、参画している企業として思うところです。

○大沼会長 参加企業としても広く広報していただきたいということで、内山委員からはもっと広報をしていただきたいという言い方でしたけれども、もっと踏み込んで言うと、市が前面に立ってもっとストレートに営業をしていただきたいというのが委員からのご要望かと思われます。

ほかにございませんか。

○久保田委員 今のことに関連して私も思うのですが、毎回、会議のたびにこのテーマについて議論されることがあるのですけれども、やはり、クリック募金云々という少し狭い範囲のことにとどまらず、やっぱり札幌市環境局等がある程度のリーダーシップを取って、この取組の（４）でもうたわわれていますように、情報の発信・広報と行動の後押しという項目があるので、そこの趣旨も踏まえて、今、環境教育や環境学習、SDGsのことを含めて、今、社会的に大きな課題になっています。ですので、これを推進していくために関係機関が連携して、今まで以上に力を入れて、ここの部分をやっていかないとはいえないと思うので、それが学校に反映されて、子どもたちの教育教材等の活用にもつながっていますので、札幌市で、ほかの分野になるかもしれませんが、よく企業とパー

トナーシップ協定を結んで推進したり、いろんな取組が行われていますね。知恵を出して力を入れてやれば今以上のことがきっとできると思いますし、それに賛同してくれる企業も増えてきていると思います。また、社会的な流れがそうですので、それに、今、背を向けてやっていくということは難しい世の中だと私は思いますので、ぜひ力を入れてお願いしたいなと思います。

○大沼会長 企業という重要なセクターは、西塚委員がおっしゃったように、企業もいろんな貢献をしたいし、内山委員もおっしゃったとおり、何ができるかを考えていらっしゃるところが非常に多いと思いますので、そういったところとのパートナーシップを広げるために、切り口の一つとしてクリック募金もあるけれども、そこにとどまらずに、もうちょっと広い切り口を考えてはどうかというのが今の久保田委員のご意見かと思います。

ほかにございませんか。

○伊藤委員 私からは、副教材についてです。

札幌市の場合は素晴らしい副教材が出来上がっていますが、学校は、小学校も中学校もだと思うのですが、結構忙しいので、どういう場面で使われているのか。教科とか、総合的な学習の時間とか、いろんな場面であると思うのですが、これだけの資料を年間きちんとできるような体制が実際にできているのかどうかですね。もしこれだけやっていれば、子どもたちには小学校の段階で環境教育についてはかなり浸透できる部分はあるのではないかなという気がするのですが、現実には、現場はなかなか大変だろうなという気がしています。この辺はどうでしょうか。

○大沼会長 現場の先生ということで、まず、野崎委員からお願いします。

○野崎委員 全部が全部は使っていません。幾つかの指針があって、ここでも僕から何回かお話しさせていただきましたが、札幌市には教育課程編成の手引というものがあって、先生方はそれを見ながらこの時期にこの授業をしようという計画案というか、元になるものがあるのです。そこを作成するときに、資料として、教科書だけではなくて、例えば、「ちきゅうとなかよくしてる？」何ページ参照とか、そういうものが中のほうにしっかりと入っています。

それから、現場の先生方は、それを見ながら打合せをすることも多いので、なるほど、こっちを見ながらということで、教材研究に使ったり、ダイレクトに子どもの前に出すだけではなくて、自分たちの勉強として使うこともあると思っています。

あとは、抜粋して使うということで、私自身が実際に使ったものは、例えば、5・6年生の雪とわたしたちのくらしというところをぱっと開くと、これは、僕が前にいた学校では総合の学習の時間で雪の学習がありました。例えば、そういうときに、そういう欲しい資料がなかなかないときに、これを見ると、意外といろんなものが載っているのですね。そういうときにこれを持ってきてもらって、2年に1回ずつ配られますから、これを持ってきて使うとか、抜粋して必要な授業のときに全部使うということがあります。

ただ、ご心配されるように、先生によっては、もしかしたら全く開かないまま終わるか

もしれないというところがやっぱり危惧されますので、例えば、うちの学校で配付するときには、しっかり使うようにしようね、すぐに教室で使えるようにしておこうという声かけを私自身がしていることは多々ありました。

○大沼会長 同じく、学校現場の能登委員はいかがでしょうか。

○能登委員 今お話があったとおりで、それぞれの先生方がそれぞれの教科でその学習をするときに活用することになっていると思います。先ほどおっしゃられた札幌市でつくられている手引の中にこれを活用しましょうと書かれているので、先生方はそれを見ながら活用していると思います。大体の先生方は、教室に置いて、いつでも手に取れるような使い方をされていると思いますので、多分、活用しているのではないかと思います。

○大沼会長 多分ではなく、きちんとされていると私は思っています。

○能登委員 きちんとされている部分が大半かと思います。

○大沼会長 伊藤委員、今のお返事でよろしいですか。

○伊藤委員 せっかくの資料をもっと活用できるシステムというか、教育委員会でもう少し活用するような取組をしていただけたらとか、学校にしてくださいということにするのか、今回、市長もこの間からゼロカーボンに取り組むというような話をされています。やっぱり札幌市として教育の中でせっかくある資料をもっと授業の中に取り入れていくということも大切ではないかと思ってお話をさせていただきました。

○大沼会長 まさに市としてもということなので、ここは縦割りではなくて、教育委員会の方も事務局をしていただいています。そういう意味で、もし鈴木さんから何かあればお願いします。

○事務局（鈴木企画担当係長） 教育委員会でございます。

今いただきましたご意見は、そのとおりだと思ってお伺いしておりました。

学校の現状として、環境という教科があるわけではございませんので、既存の教育課程の中のどの部分が環境に関係するかということを学校は考えながら取り組んでいるということです。

先ほど野崎委員からありましたけれども、教育課程編成の手引ということで、小学校1年生から中学校3年生まで、それぞれの教科をどのように学ぶのかを1年間のスケジュールとして大まかに示しているところでありまして、副教材等の活用については、先ほど委員の皆様からあったように、その中で関連を図っているところです。副教材にも関連教科の単元名がしっかりと冒頭に位置づいていたり、先生方が結びつけやすいような配慮をしながら作成に当たっているところです。

積極的な周知に関しましては、総合的な学習の時間とか、教科とか、本当に様々なところで組みながら環境教育を進めていて、学校としてエコスクール宣言ということで、学校の宣言として一つまとめているという取組があります。やはり、その取組を進めていく中で、副教材の活用も含めて一緒にやっていけるような周知の仕方も教育委員会で考えていきたいと思っております。

○大沼会長 ほかにございませんか。

○坂本委員 教育委員会と学校の先生方にもお聞きしてみたかったのですが、この委員会は、環境教育ということで、環境にフォーカスした内容について議論しているのはもちろん承知しているのですが、今、SDGsという考え方で、持続可能な社会をいろんな方面から考えていくという姿勢になっていると思うのです。SDGs的には、環境以外にも人権や福祉の話があったりということで、今、いろんな視点を取り入れなければいけないという時代になってくると思います。もちろん、それが国語、算数、理科、社会にどうやってくっついていくかというのは難しいですけども、環境教育ということは、今までと同じように環境フォーカスで進めていきたいと思いますというのが方針でしょうか。

○大沼会長 今のご質問は、最近、SDGsと言うと、環境だけではなくて、有坂委員がやっているようなフェアトレードも含め、非常に多岐にわたるけれども、その全体像ということで、ここではもちろん環境にフォーカスしていますが、この辺りはどなたにお答えいただければいいですか。

○坂本委員 別に正解はないと思うのですが、現状でどのように学校で取り組まれているのかということが気になるのです。

○大沼会長 学校で取り組まれていることですので、学校関係者である三浦委員からいかがですか。

○三浦委員 学校でSDGsに取り組んでいるかという質問でしょうか。意識をしてSDGsに取り組んでいる学校もちろんありますが、そうしないで自然とやっているところもきっとあると思います。切り口としては、総合とか理科、社会、家庭科、技術など、そういうところに入っていると思っているのです。

ただ、今、坂本委員がおっしゃるように、大前提として考えてというところは、きっとこれからなのかなと思っています。私自身もそこはすごく大事だと思っていますので、そういうところに向かっていきたいと思っているのですが、まずは子どもたちの切り口として、そういうところから一つずつやっていこうという感じだと思います。

○大沼会長 事務局の鈴木様からお願いします。

○事務局（鈴木企画担当係長） 事務局でございます。

今、校長先生にお話をいただきましたが、これまで札幌市の市立学校においては、雪、環境、読書ということで、札幌らしい特色ある学校教育ということで、平成21年から取組を進めていて、この三つのテーマは、全ての園、学校で共通して取り組んでおり、環境に対する意識の向上を図ってきたところです。今、12年目を迎えましたが、おっしゃるとおり、環境だけではなく、持続可能な社会の実現ということで、すごく広い視野で環境を捉えていかなければいけない状況になってきていると考えているところです。

先ほどお伝えしましたエコスクール宣言についても、学校の中で環境についての取組はしっかり位置づいています。その視点を少し変えて、SDGsの視点を取り込みながら取組を見直してみるとか、そういう時期に来ているように感じておりますので、そういう取

組は、引き続き、教育委員会からも発信していきたいと思っていますところですし、教育の大前提として、今年度から、人間尊重の教育ということで、一人一人の子どもたちを大切にする学校の在り方ということを前面に打ち出してきているところです。一人一人を大切にするということは、子どもたちが生活する上で、家族も大切にしなければいけないですし、住んでいる地球も大切にしなければいけません。要するに、多様性の理解ということも含めて、環境という狭いところではなく、全体を大切にするという視点で教育活動を見直そうということで、今、学校が動き始めているところです。今、ご指摘やご意見がありましたことについては、学校としてももしっかり取り組んでいこうと考えているところです。

○大沼会長 議論が活発になったのはありがたい限りですが、大分時間が押してきていて、まだ後半の説明が残っていますので、先を急がせていただきます。ご説明をいただいた後に、もし必要があれば、続きの議論をできればと思います。時間の管理が悪くて申し訳ありません。

それでは、事務局から引き続き（３）と（４）の説明をお願いいたします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） それでは、（３）の説明に入りたいと思います。

資料の９ページからでございます。

まず、アは、学習支援等についてです。

こちらは、環境プラザの見学者への展示解説や展示物を利用した見学者向けの環境教育プログラムの実施、教材の貸出しなど、利用者の要望に合わせた学習支援を行っているものです。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策に係る緊急事態宣言などのため、５月４日から７月１１日及び８月２日から９月３０日まで休館となりましたが、開館期間中は、月１回、「あそびバ！エコプラザ」として、ゲームや紙芝居、製作体験などを利用した環境学習の支援事業を行いました。

学校のＳＤＧｓへの関心の高まりもあり、施設見学については、今年度、既に中学校から環境学習やＳＤＧｓをテーマとした依頼を新規で数件いただいております。環境プラザでは、そうしたニーズに即した見学プログラムを提供していく予定でございます。

次に、イは、各種講座等の実施についてです。

大学との連携事業としては、北海学園大学のオンライン授業の中で環境プラザの取組紹介を行ったほか、藤女子大学の授業では、エルプラザ公共４施設について、エルプラザには、環境プラザのほか、消費者センター、男女共同参画センター、市民活動サポートセンターが入っておりますので、環境問題、消費生活、男女共同参画、市民活動の各テーマでオンライン講義を行っております。

また、環境相談スペシャル講座「ゼロカーボンシティさっぽろとわたしたちの暮らし」と題しまして、札幌市職員による気候変動対策行動計画や家庭向け再エネ拡大に関するオンライン講座を実施し、一般市民のほか、企業のＣＳＲ担当者、環境分野を研究する学生

など、幅広い層の参加がありました。

8月8日の道民笑いの日に開催されたライブとオンライン配信をミックスしたイベントの「みんなのウィーク」では、お笑いタレントとともに環境プラザの職員が出演し、環境プラザの取組を紹介しました。

幼児の親子を対象とした事業としては、札幌市定山溪自然の村との共催で、「森のようちえん」を行いました。10月17日、1月23日には、北海道大学をフィールドに、秋は植物を探して集める宝探し、冬は雪で型抜きなどを行いました。また、11月7日と8日、2月6日と7日は、自然の村をフィールドに、宿泊のプログラムを行いました。

今年度は、大学との連携や「森のようちえん」などの事業を継続しつつ、新しい視点を取り入れた講座も行う予定です。

続きまして、ウは、さっぽろこども環境コンテストについてです。

こちらは、小・中学生が日頃、環境のために取り組んでいる活動を発表するコンテストとして、平成20年度から実施しているものです。活動の発表を通じて、周囲の子どもたちやほかの大人たちにも活動の輪を広げていくことを目的としております。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、一堂に会してのステージ発表は困難なことから、事前に発表の様子を収録した映像を令和4年1月8日から14日にオンラインで開催した「環境広場さっぽろ2021バーチャルツアー」にて審査結果とともに動画配信を行いました。発表団体は、下の表のとおりですが、コロナ禍のため、そもそも活動自体ができなかったり、コンテストの準備に対応できなかったりということで、例年より少ない状況でした。

今年度については、引き続きのコロナ対策に留意しつつも、コンテスト会場に来られない団体に配慮した開催形式、例えば、環境教育・子どもワークショップのように、参加団体の発表会場をオンラインでつなぐなどの工夫をして、参加団体を増やしていきたいと考えております。

次に、11ページに移りまして、(4)の説明に入らせていただきます。

まず、アは、環境プラザホームページ等についてです。

環境プラザでは、講師派遣や貸出し教材、事業などについて、ホームページで情報提供を行っております。

また、フェイスブックや動画共有サイトに、「エコチャン！！－札幌市環境プラザYouTubeチャンネル」を立ち上げ、作成した動画をアップロードするという情報発信も行っています。下の表のホームページへのアクセス数ですが、昨年度は例年よりもかなり多くなっておりましたので、環境プラザに原因の分析をお願いしたのですが、はっきりとした理由は分かりませんでした。

次に、イは、環境広場さっぽろの開催についてです。

環境広場さっぽろは、子どもたちを主たる対象に、環境教育を目的とした「みらいを想う総合環境イベント」です。

平成30年度と令和元年度は、札幌ドームを会場として開催しましたが、令和2年度と3年度は、コロナの拡大に伴って、札幌ドームでの開催を見送り、札幌ドームをモデルとした仮想空間を会場とするオンラインイベントとして開催いたしました。

令和3年度は、「環境広場さっぽろ2021バーチャルツアー」を令和4年1月8日から14日に開催したところです。期間中のアクセス数は1万993件で、197の企業・団体に出演をいただきました。お手元の参考資料に昨年度の実施報告書をご用意させていただいております。

今年度は、環境広場さっぽろ2022を令和4年7月30日と31日の日程で、3年ぶりの札幌ドームでのリアル開催により実施する予定でございます。

次に、ウは、「環境中間支援会議・北海道」の取組についてです。

こちらは、行政や地域など、様々な組織との間に立って、情報提供やアドバイス、コーディネートなどのサポートを行う会議でございます。環境省北海道環境パートナーシップオフィス、通称・EPO北海道と、公益財団法人北海道環境財団、札幌市環境プラザ、NPO法人北海道市民環境ネットワーク、通称・きたネットが連携して、北海道内における様々な環境活動の支援を行っております。

また、環境省の北海道地方環境事務所、北海道、そして、私たち札幌市もオブザーバーとして、定期的に参加される会議に参加しております。

ホームページの「環境☆ナビ北海道」において、環境に関するイベント情報や助成金などの公募情報、キャンペーン情報などを配信しています。最近、ホームページがリニューアルされたということで、機会を見つけて掲載できればなと思っております。

次に、エの「環境教育・環境学習ガイド」の発行についてです。

こちらは、札幌市環境教育・環境学習基本方針に基づき、環境問題の理解促進や環境保全行動の推進に向けて、札幌市の各部局が行っている取組をまとめた環境教育・環境学習ガイドを毎年度発行しているものです。

市民への広報、情報提供に活用して、各取組への市民参加を促進し、環境教育・環境学習の一層の推進を図っております。あわせて、札幌市の各部局の環境教育・環境学習の意識を高め、基本方針の趣旨に沿った事業展開を促す役割も果たしております。

令和3年度版は参考資料に入っております。ページの前半は、これまでご説明させていただいた事業を紹介しており、6ページ以降は、札幌市の環境教育・環境学習に関する取組一覧を掲載しておりまして、札幌市ではどんな事業をしているのだろうか、こんな事業を探しているが、札幌市では行っているだろうか、などと探すときにも便利なものとなっております。

資料3の本文についての説明は以上ですが、今回、お手元の参考資料の一番後ろに、二つの補足資料を入れていますので、そちらの紹介もさせていただきたいと思っております。

一つ目は、SDGs教育旅行@SAPPOROという黄色の冊子になります。

こちらは、経済観光局で実施している事業でございまして、教育旅行で市外や道外から

札幌を訪れる学生が市内でSDGsを学ぶための体験プログラムを紹介しているものです。

プログラムは、パンフレットの7ページ以降に全部で22種類掲載されておりまして、今年度から利用が可能となっているようです。利用を希望する学校や旅行会社は、プログラムごとに設定された販売者あてに直接問合せをしていただき、申し込む形となっております。

二つ目は、#SASS2022 第3回 大学生による中高生のためのSDGs／サステナビリティアワードというイベントで、ファイルの一番後ろに入っているチラシになります。

お手元のチラシは、そのオープニングイベントのものですが、こちらのイベント本体には、本市環境局でも後援を行うほか、国の省庁や関係自治体の後援も予定されているようです。

これは、全国の中学生や高校生に、SDGsに関する調査、問題提起、提案、あるいは自分たちで行動したものについての動画を作成し、応募してもらい、それを審査、表彰するものでありまして、大学生により構成される実行委員会がイベントを運営するという特徴がございます。これからの未来を担う若者による若者のためのイベントということで、興味深い内容であったため、紹介させていただきました。

私からの説明は以上でございます。

○大沼会長 プラザ事業から、学校以外でもいろんな、あとは、先ほども議論をした人材育成、その他もろもろ、今の観光事業、様々なSDGsの取組の展開とありますけれども、どこからでも結構ですので、皆さんからご意見をいただければと思います。

○伊藤委員 2点お願いします。

昨年、私も参加させていただいた環境教育・子どもワークショップの開催についてです。

実際に令和2年度から始まりまして、全てがよかったというわけではないですが、きっかけとしてはすごくよいテーマではないかと思っています。先ほどもお話したように、学校はどこも忙しい状況にあるので、児童会館などの子どもが集まる施設を使ってワークショップをしながら、限られた人数ではありますけれども、少しずつでも広めていくという方策は非常によいのではないかと感心しながら見ておりました。特に、若い学生がリーダーシップを取りながらやっていくというのは、彼ら自身の勉強にもなってよいのではないかと感じました。

2点目は、昨年もお話したと思いますが、校外学習の関係についてです。それにつきましても、意外とまだ学校関係者でも知らない方が多いようですね。通知は学校に届いているのですけれども、実際にみんなに周知していないというか、知られていない部分もまだまだあるのではないかという気が実はしております。

私の感想ですけれども、今年は雪がすごく多くて、春先にもものすごいごみが落ちていたのを皆さんはご存じでしょうか。あきれるぐらいあって、それをやれということではないのですけれども、そういうゴミが集まっている状況、つまり本当はこれだけのごみが出て

いるというようなことが、子どもたちや市民も含めて、いろいろな場面で、公になっていけば、もっとゴミのポイ捨てなどに関心が高まるのではないかと思います。見た目でごみが多いと感じたとしても、では物理的にどれくらいあったのかという具体的な量を示す方が、説得力があると思います。例えば、子どもたちは、経験的ではありますが、学校や地域などのごみ拾いをすればごみのポイ捨てが少なくなるということもありました。昔から「百聞は一見にしかず」といいます。啓発活動をもっと具体的にするには、校外で実際にゴミを集積し分別したり、リサイクルしているといった施設を見学したりするということが大切だと思っています。従ってもっと校外学習を可能な限り全校に広めていただければと思います。

○大沼会長 ほかにございませんか。

○松田委員 先ほどの件に戻るのですが、今、伊藤委員がおっしゃった環境教育・子どもワークショップ事業というのは、いいなと思って拝見しました。

若者がファシリテーターをすることに關しては、すごくいいのですが、私は今日初めて知ったのですが、これをどうやって周知されたのかということです。もちろんホームページに載っているのは見たのですが、その辺は私も知らなかったのも、どうやってそこをキャッチできたのかなと思っていました。それをどのように周知されたのかなというところをお伺いしたいと思います。

また、同じような事業として、国際プラザがやっていらっしゃるものには私の大学も参加しているのですが、いろんなところでやられているものがどのように周知されているのかなというところが微妙だなと思っているのです。私は、今日これを知ったので、これはうちの学生にどんどん推薦できるのですが、こういうことを周知するときに、こういったチャンネルを使われているのかということをお伺いしたいです。

もう1点は、先ほどの副教材の件に戻るのですが、副教材は、多分、環境教育だけではなくて、いろいろあるような気がしています。それが公的なところ、例えば、札幌市や文科省から下りてきますね。私も現場にいたときにたくさん下りてきて、どうしようということがすごくあったのですが、全部は使えないし、教育課程もあるのでなかなか難しい、でもやらなければならないということになってくると、難しいなと。

そこで、指導主事の先生も来られているので、その辺をうまくコーディネートするとか、やりなさいではなくて、何かアドバイスをいただけたらなど。やらなくていいということではなくて、何か交通整理をしていただけたらいいのかなと。現場外の者が言うのも何ですが、ちょっと思いました。特に文科省から割と降ってくるような気がしたので、その辺も含めて何か調整されることがあったらいいなと思いました。

もう一つは、副教材の利用実績については把握されているとされていて、これも、今、降ってくると言いましたが、提出する文書が多くて学校は結構混乱しまして、それを分かった上での発言なのですが、実績をちゃんと把握しないと評価ができないだろうと思ったのです。これは、せっかくたくさんの税金を使ってやっていらっしゃると思うので、

そこをちゃんと評価して、適切なものかどうかをちゃんと判定していかないと、今後につながらないという気がしました。

その辺も含めて、今はどうなっているのかというところを聞きたいと思いました。

○大沼会長 大きく2点あって、一つは、若者がファシリテーターをするワークショップの周知徹底というか、アウトリーチをどうしたかということで、これは市の事務局へのご質問になると思います。

2点目の副教材は、後ほど学校現場の先生にお尋ねしたいと思います。

まず、事務局から、アウトリーチ、周知の方法についてお願いします。

○事務局（佐野推進係員） ファシリテーターとして現地で参加していた高校生や大学生の募集に関しては、ホームページでは募集をさせていただいていたのですが、募集期間があまり取れなかったせいか、ホームページを見て応募してきた方はいなかったので、メインのファシリテーターをやってくださった方からも周りの方に声をかけていただいたり、学校の先生からも声をかけていただいて大学生や高校生の講師を集めて行ったという状況です。

○大沼会長 それは若者のファシリテーターの話ですね。10の児童館に参加していただいたと思うのですけれども、そちらはいかがだったでしょうか。

○事務局（佐野推進係員） 児童会館を所管している青少年女性活動協会にお願いしまして、選定をしていただきました。

○事務局（東館環境政策課長） 補足しますと、児童会館に来館されて児童クラブなどに参加されているお子さんを対象に、先ほどもお話がありましたように、全ての児童会館で実施することは難しいものですから、青少年女性活動協会とご相談した中で、幾つかの児童会館を会場に開催させていただく形で、そこに通われているお子さんに児童会館からお声がけをしていただいて、そのお子さんたちに参加いただいているというのが今の実態でございます。

○大沼会長 松田委員、一つ目のご質問は今のお答えでよいですか。

○松田委員 ありがとうございます。

多分、今月末のフェアトレードフェスタは、今、有志のグループが立ち上がったりしているので、そういったところをうまく使いながらアウトリーチされているといいと思ったのです。ホームページを見てどうのこうのというのは、生徒の皆さんはなかなか難しいと思うので、そういった関心のある先生方や大人の方々を通じて、もしくは、団体の方を通じてされるといいのかなという気がしました。リストアップまではいかないですけども、その辺を捉えておくことは大事なのかなと思いました。

○大沼会長 ご説明があったとおり、今回のワークショップに限らず、様々な取組があって、どれを取ってもすばらしく誇れるものだと思うのですが、それが知られていないことは非常に残念だというご意見だと思いますので、この活動に限らず、アウトリーチをどうするかというのも一つの課題として受け止められるかと思います。

ほかにございませんか。

○石澤副会長 私は、小学校で38年間、教諭から校長まで務めさせていただきました。それから、現在、全道から学生が集まるところで講義を持っていますが、今まで札幌市の中にいた経験と札幌市から出た経験でお話をさせていただきたいと思っております。

札幌市の中にいましたときは、数々のこういう教材をいただきました。特にこの何年間は現地学習がほとんどできず、現地に行き行って実感するという経験は子どもたちにとっては大切なことではありましたが、そういう経験ができないような閉鎖的な2年間を過ごしたときに、皆さんに作成していただきました資料は、学校現場にとっては大変貴重な資料でありました。これにつきまして、先生方はもうあるのが当たり前になっていまして、つくられた方のご苦労などは知る由もないところではあると思うのですけれども、それぐらい学校現場にとっては必要な資料になっているのではないかと思います。

ただ、学校によっては、消費者教育、食育、人権教育、金融教育など、教科にない、いろんな教育がありまして、もちろん全部には触れますけれども、その地域の環境や子どもたちの実態によつての軽重があると思うのです。ですから、数値的には、よく使われている学校があったり、このパンフレットに名前が出てこない学校があったりするだと思ひます。

私自身も、川のすぐそばにある学校にいましたので、川の環境について学習するときには、環境教育リーダーを要請し、遊水路への入り方を含めて、どんな生物がすんでいるのかを教へていただく経験をいたしました。これは、現場の先生ではあのように詳しく指導できないところだす。ですから、札幌市が環境に力を入れていただいていることは、とてもありがたいなと思ひています。

札幌から離れてみると、ここまで組織的に、詳細な資料を作つていっているところはないのではないかと、いろんなところで実感しているところだす。継続的に子どもの意識をへるためのエコライフレポートは、私も何十年も経験していますけれども、休みの前には持たせて帰してました。家族と一緒に、エコを意識して生活する機会の一つとして、貴重な資料と考えています。そして、2学期に、どう意識して生活していたか先生方が投げかけていました。「ああ、そんなこともできたのだね」というような評価をするという形で使われていましたので、意識の改革にはなつたと思ひています。また、子どもたちが主体となつて、自分には何ができるのかと行動を考える際の資料にも間違いなくなつていったと思ひております。

ただ、それがどう使われていたかを調べるとなると、またそれは大変なことだす。日常的には資料が教育現場で活用されていますし、札幌市の教育課程編成の手引の中にももちろん明記されていますし、各学校において、雪、環境、読書のような重点に対して何を使うかということも必ず、学校の動きとして、総合などのカリキュラムの中で位置づいていたかと思ひます。ですから、学校現場としては大変活用させていただいたと思ひているところだす。

○大沼会長 松田委員、今のご説明で大体お答えになったという理解でよろしいでしょうか。

○松田委員 現場というよりも、行政に聞きたかったのです。行政側でどう評価されているのかが聞きたかったということです。

○大沼会長 文科省から直接降ってくる教材や、もちろん市が独自につくっている教材など、いろいろあるけれども、現場として使われていないことはないだろうということでした。ただ、それをどう評価するのかというのは簡単ではないと思いますし、評価をすると、また現場の先生が疲れてしまうということもあるのですね。我々が大学にいても評価疲れというのは常にあるので、そこら辺のさじかげんは慎重にいきたいと思っております。

そろそろ時間が押してきているので、まだご発言をいただいていない村形委員、いかがでしょうか。

○村形委員 皆さんのお話を聞いていて、すごくたくさんの資料を子どもたちのために考えてくださっているのだなと思いました。

また、学校の先生がなかなか使えないという副教材については、学校でできなかったことを夏休みや冬休みに家庭に持ち帰って一緒にやるというのも一つの手かと思いました。

先ほどありました家庭に持って帰ってくるエコライフレポートについて、子どもたちは学校で先生と一緒に考えてやってくるのですが、正直、家庭に持って帰ってきたときに、私の保護者の目線として实际的で申し訳ないのですが、子どもが親にこれを見せて一緒にやろうということはないのです。ですから、もう少し保護者向けにも環境の発信をしていただければ、せっかくつくっていただいているし、学校でも勉強しているので、親も一緒に子どもとお勉強ができるのかなというのは、今、聞いていてすごく感じたところです。

こういう副教材はすごくもったいないので、うちの子どもは中3なのですけれども、こういうものがあるとすごく勉強にもなるし、自由研究の教材にもなると思います。内容がすごくいいので、こういうところから一生懸命、家庭と一緒に育つというか、勉強していく方法も、先生方の仕事を少し減らせる部分もあると思いました。

○大沼会長 まさに、学校だけ、子どもだけではなく、そこからどう広げるかということですね。先ほど坂本委員からも同趣旨のご発言があったと思います。

有坂委員からまだご発言をいただいていないと思うので、お願いします。

○有坂委員 お話を聞いていて、すごく疑問に思っているのは、環境についてどういう捉え方をされているのかということです。環境の定義そのものは、それを取り巻く周りの状況ということですが、今日の話を聞いていると、多分、グリーンなイメージなのかと思うのです。実際にここで扱われているのは、いわゆる自然環境のことを考えるみたいなイメージですけれども、先ほど坂本委員からも発言があったように、SDGsのことを考えることだと。環境は私たちの周りの全てのことなので、言葉の定義からしてグリーンのことだけを考えるわけではないと思います。ですから、環境というものが何なのかを考え直してもいいというか、その定義についてしっかりと捉え直す必要があるのではないかと感じ

ています。

また、副教材やエコライフレポートを含めて、札幌市が脱炭素にすごく積極的に取り組むという内容は分かるのですが、もう少し生物多様性とも絡められないのだろうかというのは全体的に思います。

例えば、エコライフレポートで言うと、植物は日光が当たると二酸化炭素を取り入れて酸素を出すと書いてありますね。であるならば、例えば、周りにどんな木があるのか調べてみようということをこの六つのできることに入れるとか、札幌には雪の中にすんでいるコウモリがいるのですけれども、特徴のある札幌の雪と生物多様性が関わることも少し触れられていると、気候変動の面だけではなくて、札幌はこれだけ緑が身近にありますから、生物多様性も意識できるようになると思います。環境教育・環境学習が、子どものときにとっても大事だと思うのは、原風景をつくるということがすごく重要だと思うためです。身の回りの景色が大事だとか変わってほしくないと思えばこそ、二酸化炭素は排出してはいけないのだと感じると思うのです。なので、原風景がやっぱり自然にあふれているものでなければ、それを守ろうという気にはならないし、変わっていることにすら気づかないのだと思うのです。だから、私が子どものときに比べて、多分、見ている風景は大分変わってしまっていて、それが子どもたちにとっては当たり前だと思う。そこから変わっていかないようにしたいというふうに思うということは、もうスタートが違うのだと思うのです。年を追うごとに開発が進んだ状態を原風景として捉えていて、そこから変わらないようにと思っていると、結果としてどんどん開発されていく状況を止めるために、もっと生物のことを子どものときから実感を持って学ぶ機会がとても重要なのだと思うのです。

ですから、二酸化炭素排出のことはもちろん大事けれども、その根本には、やっぱり生きていくものが身近にいるということをもっとちゃんと伝えることが必要なのではないかというふうに、皆さんの話を聞いていてすごく思いました。

○大沼会長 原風景というキーワードでまとめていただきましたが、自然や生物とじかに関わることの重要性ということで、先ほどの石澤副会長やほかの委員がいろいろおっしゃっていただいたことを全体でまとめていただいたと思います。

時間が若干超過ぎみなのですが、先ほど久保田委員が手を挙げていたので、もしあればお願いします。

○久保田委員 時間も迫っていますが、二つだけお話をしたいと思います。

一つは、先ほど市教委の担当の方もおっしゃってしまして、そのときに発言したかったのですが、札幌市の特色ある教育として、雪、環境、読書という三つの理念を掲げていて、その大きな3本柱の一つとして、環境の取組が十数年続いています。皆さんのいろんな意見を聞いていますと、皆さんも思うと思いますが、今、SDGsの開発目標が設定されて、それに基づいていろんな取組が進められていますね。ですから、当時設定された環境の捉え方と、10年ちょっとがたって学校教育の中で環境をどう位置づけてこれから取り組んでいくかということについて、果たしてこれまでどおりでいいのか。先ほどお

っしやっていたように、今まさにそれを捉えて新たに考え直していくような時期に差しかかっているのではないかと私は思っているのです。

例えば、そういう理念があれば、今の取組はこういう部分を直したほうがいいねという話になっていくと思います。さらに、それを踏まえて、札幌には小・中学校が300校あるわけですから、ここで議論していることも決して無駄ではないと思いますし、それを踏まえてどう学校で実践を図っていくかということにつながると思うので、そういう視点は非常に大事だと思います。

もう1点は、先ほど親子で云々という話がありました。先ほど観光・MICE推進部で作られたSDGs教育旅行パンフレットがありました。よくできていると思うのですが、私は、札幌には、環境に関するものを含めて、親子で学べる施設が非常に豊かにあって、もちろん自然環境もそうですが、そういうリソースに恵まれた土地だと思いますし、こんな都市は北海道では札幌以外にないのではないかといろいろな施設があります。ですから、例えば、夏休みや週末に親子で学べるようなものを、どういう形になるかは分かりませんが、いろいろ考えてやっていけば、学校以外にも取組がさらに進んでいくのではないかと思います。

今のことは思いつきで申し訳ないですが、今、GPSが普及しているので、昔はよくスタンプラリーというものがありました。スマホさえあれば、例えば、GPSで回った箇所である種のデジタル版のスタンプラリーも簡単にできるし、子どもにとって楽しい仕掛けとか、行きたいなというものがあれば、親子で学ぶ機会にもなるし、公共カードというものが最近よくありますけれども、ある施設に行くと限定のカードをくれるとか、きっと子どもはそういうものを集めて楽しんだりということもありますね。いろんな工夫ができると思うので、そういうことを利用すれば、札幌市の非常にたくさんある資源を、これは環境を学べる施設ですが、生かしていけるのではないかと私は思うのです。

○大沼会長 せっかくいろいろな素材に恵まれている札幌を有効に生かしたいというご提案をいただきました。

時間が大分押してきて申し訳ないのですが、最後に、石澤副会長から今日の議論の全体を振り返っていただけるとありがたいです。

○石澤副会長 いろいろな立場の方が環境教育について熱く語られ、いろいろな視点から学ぶ機会をいただきました。大変ありがたかったと思っております。

今の子どもたちはこれからの札幌を担っていくわけですから、どの学校でも環境教育で学んだことがきっかけになり、子供たちが主体的に環境に目を向けたり守ったり、自分事になることを願い、進めています。そのためには、環境教育の情報は集めているところです。当然、それに向けて資料は進化させていく必要があります。今日はそのために具体的なお話をいただけたと思っております。特に、保護者も巻き込みながら進めることや、札幌にあるすばらしい環境素材をどのように発信することが効果的か、その発信の仕方についても、たくさんのアイデアが出されました。以上です。

○大沼会長 うまくラップアップしてくださり、ありがとうございました。

司会の手際が悪く、時間が大分超過して申し訳ないのですが、議事の中にその他があります。その他の議案として委員の皆様からどうしても述べたいことはございますか。

○松田委員 先ほど副教材の利用状況について聞きましたが、学校側が云々ではなくて、プロジェクト評価としてどうなのかということ聞いたのです。行政がつくられたプロジェクトとして評価をして、次によいものにするPDCAをどう回されているのかなということ聞いたかったということです。そのためには、学校現場からこういうふうに使っていますということを聞かないとできないだろうなと思ったので、降ってくる提出物があって申し訳ないですけれどもという話をしました。学校云々ではないということです。

○大沼会長 それでは、時間が大分超過して、運営がまずくて申し訳なかったのですが、事務局に進行をお返ししたいと思います。

○事務局(谷内環境教育担当係長) 今日の会議は時間いっぱいになってしまいましたが、また次の機会にご議論いただきたいので、今後の予定などについてご連絡をさせていただきます。

次の委員会の予定は、現在のところ、11月中の開催を予定しております。後日、日程調整をいたしますので、ご協力をお願いいたします。

3. 閉 会

○事務局(谷内環境教育担当係長) それでは、これをもちまして、令和4年度第1回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会を終了いたします。

本日は、お忙しい中をご出席いただき、また、長時間にわたり活発なご議論をいただきまして、誠にありがとうございました。

以 上